

平成29年度 高齢者及び認知症支援のための看護連携推進事業
平成29年度北空知地域住民フォーラム開催結果

| 項目 | 内容 |
|---------|---|
| 1 現状・課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・平成27年度住民フォーラムを開催している。今後も在宅療養や終活について自分の問題として考えられるような住民への普及啓発は必要であるという結果となった。 ・北空知地域は、在宅医療よりも病院や施設に入院・入所し最期をむかえることが多い地域。患者本人、家族の在宅医療に対する理解、覚悟も必要。家で亡くなりたい高齢者もいるが、病院で安心したい家族の思いもある。単身、老老介護の問題もある。 |
| 2 目的 | 地域住民が自分や家族の老いや死を自分自身の問題として考えることができる機会となる |
| 3 対象 | 北空知地域在住の住民、地域住民の療養を支える支援関係者 等 |
| 4 日時 | 平成29年12月2日(土) 13:30~16:00 |
| 5 場所 | 深川市経済センター 多目的ホール |
| 6 出席者 | 135名 (事前申込時 住民55名、支援関係者43名) 当日は未確認のため内訳は不明 |
| 7 内容 | <p>1 演劇 「なかよし老人」 ～ぼけても、病気になっても支え合って、地域で暮らす老人の物語～ 妹背牛町民劇団「わかち愛」</p> <p>2 在宅療養で使えるサービスの紹介 「自宅で安心して暮らすために」 北空知地域医療介護連携支援センター 深川市立病院訪問看護ステーションみのり</p> <p>3 意見交換 「北空知地域で在宅療養するために」 「病気や障害があっても自分らしく生きるために」 コーディネーター 北海道看護協会北空知支部</p> <p><意見></p> <ul style="list-style-type: none"> ・祖母を看取りたかったが看取れず、後悔している ・核家族が増え、若い世代と高齢者が分断されている。その問題も大きい <p>→北空知地域でも少子高齢化が進んでいる。その中でどのように準備をしていくか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本州の親戚が家で看取りを実施。栄養状態が悪くなった際医師に点滴をお願いしたら、「在宅療養では不必要な医療はしない。そのような覚悟でいたのではないか」と話され、最後はろうそくの火が消えるように亡くなっていったと聞いた。自分は人の死を看取るのは恐怖。老老介護で相手が先に逝く時に、自分は一人で看取る自信がない。 <p>→私達は家で看取ることの経験がない。看取りについて学ぶ機会も必要かもしれない。</p> |
| 8 結果 | <p>目的に即して評価を実施(目標の設定はしていない)</p> <p>目的: 地域住民が自分や家族の老いや死を自分自身の問題として考えることができる機会となる</p> <p>1 プログラムから: 演劇では前後に脚本を書いた渡辺先生、妹背牛町民劇団水上代表の挨拶と演劇内容が高齢者自身も支えられるだけでなく支える側になる必要があるという主旨の内容であった。さらに、演劇では、認知症、伴侶の死、最期どこで死にたいか等、高齢者・人生の最終ステージに向けてどう準備し迎えるかを考える題材を提供してもらえた。</p> <p>2 社会資源の紹介から: パンフレットを使って在宅療養で使えるサービスとその限界を伝えることができた。訪問看護の事例では、がん末期の父を支える家族が、親子で最期に布団を並べてゆっくり語り合う場面が紹介され、人生最期にどのように過ごすか考える機会とな</p> |

った。

3 意見交換から：会場全体の意見交換で、緊張が走る場面だった。関係者に率先して意見を述べてもらい、住民の核となる介護者とともに歩む会の代表に意見を振る形ですすめ、意見を出しやすくする配慮を実施。住民からの積極的な発言は少なかったが、反応の良い住民に投げかけることで、看取りに関する体験や不安について、少子高齢化の問題について意見を出してもらえた。演劇と社会資源の紹介、事例紹介で在宅療養を送る、支えるということを考え、意見交換で深めるきっかけとなった

4 アンケート結果から：回答者数90名 配布数124名 回収率72.59%

・演劇で在宅療養について考えることが出来た、まあまあ考えることができたと回答した人は合わせて89人で99%。

・在宅療養で使えるサービスの紹介について知ることが出来た、まあまあ知ることができたと回答した人は87人で97%

・自分自身の人生最期を考えることが出来た、準備が必要だと思ったひとがそれぞれ45人、50%、47人、52.3%で約半数。

・家族の人生最期を考えることが出来た、準備が必要だと思った人がそれぞれ38人、42.3%、26人、28.9%で自分自身よりも低かった

・演劇、社会資源の紹介、全体を通して良い機会だったという感想であり、人生最期について考えるきっかけとなったと感想を書いている人があった。

・時間はちょうど良いが最も多く81人、91%。

・参加のきっかけは知人の紹介が最も多く45人、50%。

5 まとめ

・全体を通して、参加者が在宅療養や人生最期の準備を考えるプログラムであった。

・準備については、劇団員への負担が大きかったことから、脚本家や代表だけではなく劇団員との調整も重要である。

・物品準備、資料準備、演劇後の会場設営は事務局が担っていた。

・参加者の申込が少なく、知り合い筋に出席を依頼する結果となった。広報の活用、各自治体において民生委員、町内会等への積極的な周知、教育委員会・学校を通じて児童・生徒、保護者等へ周知する等、周知方法の見直しが必要である。

・次年度以降も継続し、深川市以外の自治体で開催する方向でⅢ部会において検討する。

・結果を住民にフィードバック出来ると良い。HPだけではなく、支援センター便りで織り込みチラシ入れる等。意見交換で住民の意見が出されているので、ピックアップするとよいか。

・意見交換で看取りの不安や少子高齢化問題が話されているので次回の住民フォーラムで取り上げていく。